



# 転生しちゃったよ (いや、ごめん) 1

ALPHA POLIS

ヘッドホン侍  
*Headphonesamurai*

アルファライト文庫 

# 目次

本編  
7

番外編  
ジョーンとウィルの魔法実験  
271

ベリル家に仕えるメイド長。  
ウィリアムスに対して過保護。

▼ マリー

ウィリアムスの教育役。  
美形でスパルタ。

ジーン=ヴェリトル▼

キアン=ベリル▶

ウィリアムスの父。エイズーム王国の  
騎士団長を務める。親バカ。

ウィリアムスの母で、  
もち肌の美人。親バカ。

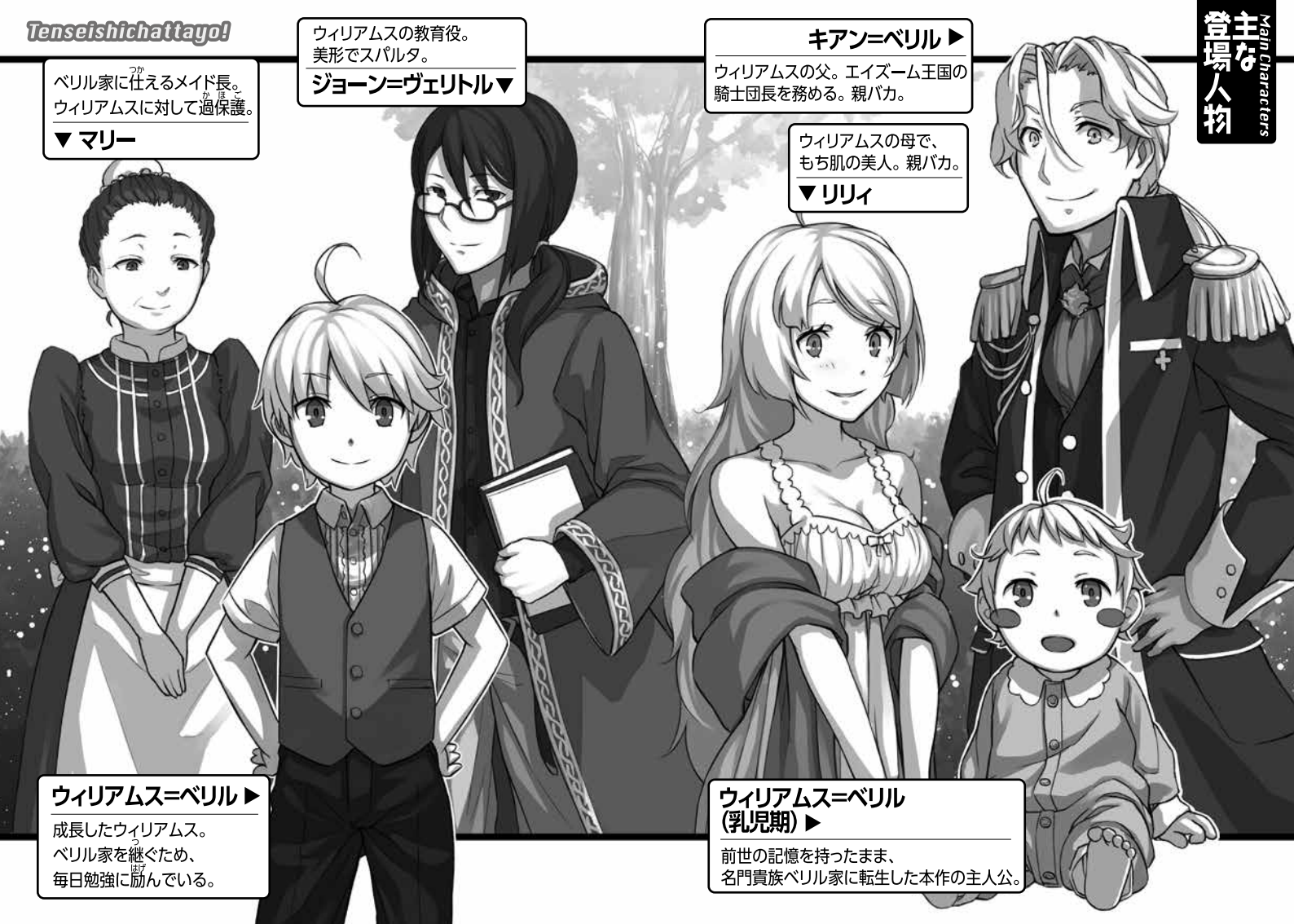
▼ リリイ

ウィリアムス=ベリル▶

成長したウィリアムス。  
ベリル家を継ぐため、  
毎日勉強に励んでいる。

ウィリアムス=ベリル  
(乳児期)▶

前世の記憶を持ったまま、  
名門貴族ベリル家に転生した本作の主人公。



1

その日は、梅雨の時期だというのに見事な快晴で、朝から気分がよかった。俺の通う高校は都会から少し離れた場所にあり、やや廃れた最寄り駅には、朝と夕方だけ人がわんさかいる。

通学ラッシュというやつだ。

田舎の高校は駅から数十分歩いたり、バスを乗り継いだりすることが多いが、辛いなことに、俺の学校はそこまで遠くない。

朝から数十分歩くとか、そんな運動をさせられたら俺は切れる。

ていうか、そんな高校選ばないだろうな。うん。

それにしても、今日はすこぶる天気がいい。スキップしたくなるくらい。

歩くとちよっと汗ばんでしまうのが夏の知らせのようでもまた、嬉しくなってしまう。

そんなことをぼんやり考えながら歩いていると、不意に肩を叩かれた。

「おはよー、翔！」

「ん、ああ、おはよーさん、寺尾」

なんだ、クラスの女子とかだったたらよかったのに……いや、別にそんなことは思っていない。思っていないぞっ！ これっぽっちも。

寺尾。

親友だと俺は思っている。高校に入ってからからの付き合いだが、趣味や性格などが俺とすごく似ているから、すぐに仲良くなった。ある一点だけ、決定的な違いがあるが。

「なんだ、その顔は。どうせ、なんだ寺尾か、なんて失礼なことを考えてんだろ」

「あ、バレた？」

はは、と笑って冗談っぽくしてみたが、すばし凶星である。

俺と寺尾の決定的な違い。

奴は、モテる。

所謂いわゆるイケメンという奴なのだ、奴は。

奴、奴って煩うるさいって？ 仕方ないだろ、「奴」って貶けなして呼ばないとやってられない気持ちなんだ。

「はあ……俺はお前のその顔がうらやましい」

イケメン度の違いという悲しい現実を突きつけられ、快晴の空に反して小糠雨こぬかあめになった俺の心。

「なんだ、それ。全く……いっつつつーも言ってるけど、嫌みだぞそれ。お前が言うなよ」

真面目まじめな顔して言う寺尾。

日常のテンプレート的なやりとりである。

もはや、ここまでの一連の流れが挨拶あいさつと言ってもいい。

しかし……うう。

いつもこう言ってくれる寺尾は優しいんだな、だからモテるんだ、余計。

教室でも楽しそうに女子と話してるし、ほら、今も女子に挨拶されてたし。

誰にでも分け隔へだてなくフレンドリーで、それでいてチャラクなくて優しいなんて、どこなのといった。……いや、寺尾だったな。

対して、俺は。

認めたくはないが、女子の皆さんに嫌われてる。

俺から挨拶しようものなら、大抵の子は顔を真っ赤かにしながら小声でぼそぼそと言って逃げちゃうし、教室でも、俺に話しかけられた子はなぜか皆、一分と経たたずに他の女の子にどこかへ連行されていってしまうのだ。

たまに遠くから「ズルイ」とか「抜け駆けが」とか聞こえるんだが……俺は卑怯ひきまうな人間として認識されているのか……？

ただ普通の高校生活を送っているだけなのに。

俺と寺尾の何が違うんだよー！！

……世の中は不平等である。  
おっと、あれこれ考えていたら寺尾に不思議そうな目で見られてしまった。

「な、なんでもない」

咄嗟に言ってしまったが、これじゃ「何かあります」と言っているようなものである。

しかし、寺尾は笑顔で「そうか」とだけ呟いた。

この対応こそが紳士なのだ。見習おう。

お手本になる人物を友達に持てたと思うことにしよう、と一人勝手に納得して頷いていくと……。

花瓶が降ってきました。

……え？ アレ？

## 2

——ここは、どこだ。

狭いということくらいしか分からない。視界は暗く、身を包むような、浮遊しているような感覚しかない。

俺は今、俺の知っている世界ではないところに来てしまった……はずなのだが。

要するに異世界。要すらなくても異世界。

何だそれって？ ……はあ。

単刀直入に言おう。

——神様の奴に言われた。

つまり、俺はよくある『異世界に転生』という道を歩んでしまったわけだ。



花瓶が脳天に直撃した。

世界が妙にスローモーションになって。

頭のとっぺんに陶器のそれが触れて、徐々に重圧を増しながら、頭蓋骨を軋ませていく

ような感覚。

死んだ……！

と思っただが、気がつけば真っ白な空間に一面のお花畑。

天国か？ と思っただが、それにしては輪廻転生の輪とか閻魔様とか最後の審判とか、そういうイベントが何一つ起こらなかった気がする。

意外と味気ないな……。

しかし花瓶当たって死んで、さらにお花畑って何の嫌がらせだ。花だらけじゃないか。もしかして、俺のことを揶揄してるとか？

俺の頭の中はそんなお花畑じゃねえぞ！

と意味のないツツコミを一人でしていると、花畑が消えた。

視界には真っ白な空間だけが残る。

「誠に申し訳ありませんでしたー！」

ジャンピング土下座をしながら目の前にいきなり現れた……老人。

えーと……何なんだろう、この状況。

「え、ちょっと、どうしたんですか、顔あげてくださいって」

今の事態が呑み込めない。とりあえず説明が欲しいのです。

「許してくださいさるのかー？」

俺の言葉に、ぱっと顔をあげた老人がキラキラした目で縋りついてきた。

……。

……嬉しくない。

ここは天国のはずなのに嬉しくないぞ。

花畑と言い、目の前で土下座している老人と言い、嫌がらせか？ おちよくっているの

か？

地味に嫌なことはかり続く。

そこで、俺はある可能性に思い当たって顔が青くなった。

もしかして、ここは地獄だったり……。

「ここは天国でも地獄でもないですぞ」

地面に這いつくばっていた老人が立ち上がってそう言った。

もう謝るのは止めたのか。

謝られている理由は分からないが、あの必死な様子から見るに相当なことをしでかした

んじゃないだろうか。

切り替え早くないか？

そこで、ハツとして老人の顔を見つめる。

俺、何も言っていないよな……？

指で唇を触れて確かめてみるも、口が勝手に開いて何かを言った様子もない。

ってことは、今この人、俺の心読んだ？

「僕（わ）は人ではない、神じゃ」

……まじか。

俺はパカんと口を開けた。

そして、周りを見回して遠い目になる。視界に入るのは、白、白、白。白一面の空間。たとえ、雪国で吹雪に襲われたところで、ここまで白一色に染まるようなことはないだろう。

ああ、マジなんだろうな……。

そう確信させられる風景に、溜息をついてしまった。

「もしかして俺……アナタのミスで死んだ、とか……言いませんよね？」

最近、ハマって読み漁っていたネット小説では、こんな状況の場合、大体そういう展開になっていた。

そんなはずはないよな、と苦笑交じりにそう言ってみると。

「その通りじゃ」

胸をはる老人。

……コイツ……絶対反省してねえ……。

「(言い) 訳を聞きましようか」

心の中で付け足した言葉は伝わっているのだろうが、あえて口には出さない。俺の溜息がさらに深くなる。

「えー……まあ、ちよつと知らぬ間に、花瓶に生けてあった植物が僕の髭に引っかかってな」

……髭。

俺の死因は髭か、髭なのか。

ちよつとつなだれてしまう。

「……で、俺はどうなるんでしょう」

俺は、頭を抱えながら唸る。

「……ずいぶんあっさりしとるんじゃないな」

驚いたように、神は長い眉毛から目を覗かせた。

「ん、まあ……ここでウダウダ言つても。俺は殺されても笑顔で赦すようなことはできないし、怒つてはいるんですけどねえ。……ここでわめき散らしたら、元に戻してくれるわけですか？」

一気に言うと、神はまた驚いた表情。神と名乗るような存在が土下座して謝っているのだ。元に戻すことができるのなら、最初から戻しているだろう。

「そうは言つても、普通の人間なら足掻くものなんじゃが」

ふーん、そうゆうもん？

まあ、あっさりしてるのは俺が天涯孤独の身つても理由なんだろうけどな……。ふーと息を吐いて神様を見た。

「で、どうなるんです？ 俺」



「すまんが、転生か消滅かを選んでもらうことになる」  
消滅はないだろ！ それはひどい！

選択の余地はないも同然じゃないか。……仕方ない。

「……転生します」

俺がそう言うと、神様は深く頷いて「この度はほんとに……」とか言い出した。

ほとんど聞き流してしまったが、最後に「さすがにお詫びと言うか、何か願いを叶えさせてくれ」と結んだのが耳に入って俺は唖った。

それは、つまりネットで流行っているところの『チート』とやらをくれるということだろう。

魔力チート、体力チート、思い浮かぶチートはたくさんあるが、これだ、というのが見つからない。

それに、小説の主人公たちは大抵がその能力に振り回されたり、それが原因で厄介事に巻き込まれたりしていた。

それに何より、別に俺は無双がしたいわけじゃない。

何がしたいかと問われたら、人に好かれない。愛されたい。望みが高すぎるか……そうだな……まあ、今みたいに嫌われたくはないわな……。

それに人生でやっちゃまったなって失敗は結構あったりする。経験を、生かすか。

「前世の記憶をすべてそのままにして欲しいです」

「それだけでよいのか？」

「まあ、あんま高望みするとあとが怖いんで」

苦笑しながら答えた。

舌切り雀で欲張りなお婆さんが酷い目に遭った話は、幼児期の俺にとって衝撃的だったのだ。

「そうか」

神様は優しそうに笑った。

「では、いつてらっしゃいませ、じゃな」

神様がそう言うと、俺の身体は温かい光に包まれた。



……で、転生したはずなのだが、どういうわけか、俺は今狭い空間に漂っているようなのだ。

あの神、またミスしたんじゃないだろうな。

——っ!?

突如、世界が収縮し出す。  
ひどい頭痛がして、何かに引つ張られるような気がする。  
うへえー、やべ苦し……死ぬ……つ。

「おぎやあああああああ（痛ええええええええええ）」  
急に、視界に光が溢れる。

……あ、もしかして今のが出産？

### 3

こうして見事な産声をあげた俺だが。

いや、マジで痛かった！

だつてさ、この赤ん坊の柔らかい頭蓋骨がすごい勢いで軋むんだぜ？

一瞬、またお花畑が見えたわ。

つーか、花瓶を思い出して鬱な気分になった。

久しぶりに空気と光に触れたように感じて、クラツとくる。

右も左も分からないうちに——看護師だろうか？ 助産師だろうか？——俺はほんやり

と視界に映るふくよかな影の手に包まれ、生ぬるい液体につけられた。

おお、これが産湯か。ん……気持ちい。

身体中にくっついてる血は母親の努力の証なんだろうが、正直早く落として欲しい。

「ゞメ∞±ε%£&# \$」

ふくよかな人が俺を覗き込んで何やら言うが……うっわー。

当然の如く、分からなかった。

あー、シクった。神様に言語の能力くらいつけてもらえばよかったかな……。

まあ……今更悔やんでも仕方ない。いきなり流畅にしゃべり出して気持ち悪がられるよ

りはマシだと思うことにしよう……。

日本語覚えるのに苦労した覚えはないし、心配はないだろう。

そうこう考えているうちに、身体に急な浮遊感を覚える。

ふくよかな人に持ち上げられたようだ。背中に当たる柔らかい指の感触で納得した。

「※Tc\$¥#, #c#.クー」

……うん。嬉しそうなことだけは分かったよ。

俺は母親であるうに渡され、顔を覗き込まれる。

しかし、これだけ近距離なのに顔がはつきり見えん。生まれた瞬間は、光に慣れなくて見えないかと思つたが、どうやら違うらしい。

そういうば赤ちゃんは視力めっちゃ悪いんだっけ？ 聞いたことがある気がする。でも雰囲気からとにかく喜んでくれているのは分かった。優しく抱き締める腕から、大切にされているのも感じられた。

それだけで、すごく嬉しくて、幸せいっぱい気持ちになる。

「#◇◎£€≧、ウイル、\*◎#£%◇。&\*@%£%、ウイリアムス」

鈴を鳴らすような綺麗な声。

何回も聞こえたから分かった。そうか、俺はウイル——名前はウイリアムスカ。

幾度も大事そうに俺に話しかける声で実感した。

これが親の愛情なのか、と。

前世では得られなかったこの感情を認識できて、それだけで身体中が温かくなった。

納得のいかない事故ではあったけど、結果的には神様にちよつと感謝しようかなと思えるくらいに。

そう思うと、急に睡魔が襲ってきた。もう少し、この温もりを味わっていたいんだけどな……。

俺は抵抗を試みたが、赤ん坊の生理現象にあえなく敗北したのであった。

#### 4

はっ。

と、目が覚めた。

うん、腹減ったんだ。

つまり、やばい、泣きそう。

でも俺は泣かない！

男は涙は見せないんだぜ！

「……ふえっ」

……泣いてなんかいないさ。

ちよつと目から汗は出ちゃったけど、俺はなんとか堪える。

そして、まだ思うように動かない手足をじたばたさせてみた。

うーむ。柔らかい布団だ。いや、ベッドだろうか？

視界がぼやけていてよく分からないが、床より高い位置にある気がするので布団ではな  
いと思う。

まだ首が据わっていないので、目だけをきよろきよろさせて周囲を見てみる。赤と茶色を基調とした家具があつて、ボンヤリと見える壁は白。天井も白だ。

あ、「知らない天井だ」っていうの忘れてた。

俺の読んでいた数々の小説では、よく主人公が取ってつけたように言っていたから、俺も機会があればぜひ言おうと思っていたのに……残念。

とか何とか考えて紛らわせようとしているうちにも、俺の身体は空腹を訴えている。

「……うえっ」

ダメだ、耐えるんだ俺。大の大人が迷惑をかけてどうする！

「……えうっ」

——もうダメだ！

「うぎゃあああああ」

すごい勢いで泣き出す俺。

あーあ、泣いちゃったよ、と恥ずかしくなるが、よく考えてみれば俺赤ちゃんだった！。まあいいか、と結構簡単に諦めた。

うん、何事にも諦めは大事だと思うんだ。

だって、これからあの時期が続くんだから。

男としては、何とも羞恥な時期が……。

「%£%@、▲▽☆ー?」

母親と思われる声が聞こえて、目の前にはんやりと姿が見えた。

優しく抱き上げられ、少し驚いているうちに口に何かが当たって反射的に吸い付いてしまふ。

おおうっ！

……あああ、いやあ、あの、乳児期の本能ですから、他意はないですから、許してください！

って誰に釈明してんだ俺。

しかしそんなことを考えてる間も、俺は乳に吸い付いて飲みまくる。

ぶはあ、呑んだ呑んだ。

え、字が違うって？ 仕方ない、いま俺は混乱しているんだ。

ただでさえ前世では女子に避けられていて、女性には免疫がないのに。

俺、変な顔してないよな……？

自分の子供が乳飲んでにやけてるとか、気持ちわる……。

……。

うん、諦めは大事だよ……な！ うん！

飲み終わりましたよー、もう大丈夫ですよー！ 顔が大丈夫じゃなくなるんで、さっさと

下ろしちゃってくださいませー！

アピールをするため、ほんやりと認識できる顔をじっと見つめてみた。  
うおっ。

持ち上げられ身体が母親に寄りかかるように抱っこされた。ポンポンと優しく背中を叩かれる。

おー、これでゲップをするのですね、お母様。

「……ゲブツ」

ちよっと恥ずかしいです……。

でも、ミルクを吐かないように頑張ったから、よしとする。

そしてベッドに下ろされるかと思ったら、お母様の腕に抱かれてゆーらゆーら。

「▽&ゞ、\*&#%£€€」

なんか分からんけど、たくさん語りかけてくれます。

ふぁ……眠っ……。

## 5

「おぎゃああああああああっ」

気を失いそうなくらい、痛かった。

初めての出産。

がんばれって励まされて、やっとの思いで産道を潜らせたけれど、限界だったわ。視界が白くなっていったもの。

それが、元気のいい産声を聞いて一気に戻って来れちゃった。

……ふふ、将来はあの人に似て腕白になるかしらね。

自然と口角が上がる。

メイド長のマリーが、私の子を大切そうに抱えて産湯につけて、丁寧に洗ってくれる。しわくちなな顔ね……かわいい。

……いま、気持ち良さそうな顔していたような……気のせいよね。

「元気な男の子ですね」

マリーは私の息子を覗き込んで嬉しそう。

お湯から小さな身体を持ち上げて布に包み、私の方に抱えてきてくれる。

「お母様ですよー」

マリーは自分のことのように、喜んでる。

そんな風にマリーが思ってくれることが嬉しくて、つい涙が滲んできちゃった。思わず涙を隠そうとして、マジマジと我が子の顔を覗き込むようにしたわ。

……不思議そうな表情をしたのも、気のせいよね？  
 しわくちゃんえ……でも、本当に可愛い。  
 あら……？

「笑っているのかしら、ウィル、私の可愛い息子。あなたの名前は、ウィリアムよ」  
 初めて授かったあの人との子。  
 嬉しくて、愛らしくて。

この気持ち少しでも伝わるように思いを込めて、名前を何度も呼んだの。  
 そしたらね、もうウィルったら、幸せそうな顔をして眠り始めちゃった。

これは、気のせいじゃないと思いたいわ。

「よろしくね、私の可愛いウィル」



結局、幸せそうな顔をしたまま眠ってしまったウィル。  
 起きてるときも可愛いけれど、眠った顔も可愛いわ。

あの人譲りの銀髪に、私と同じ緑の瞳。

まだしわくちゃんとは言え、あの人に似て、将来は期待できる整った顔をしているし。

早く目を開けないかしら？

スヤスヤと腕の中で眠るウィルをそっとベビーベッドに下ろした。

さて、出産で疲れたけれど、これくらい！ 母は強いのよ！

……寝室から隣の部屋に行って、ウィルの着替えを取ろうとしたんだけど……。

やっぱり駄目だったわ。行くだけで疲れちゃった。

ソファにだらしなく座ってしばらく放心していると……。

「うぎゃあああああ」

突然、隣の部屋からすごい声。

あらあら、ウィルが目覚ましたのね。

急いでソファから腰を上げて寝室の扉をそっと開き、ウィルのもとへ向かう。

「お腹が減ったのかしら？」

ベビーベッドの中のウィルを見ると、すでに泣き止んでなんだか悲しそうな顔をしてい  
 る。

ごめんね、待たせちゃったかしら。

ウィルを抱き上げて、胸元を広げた。

初めての授乳でドキドキする。

ちゃんと飲んでくれるかしら？

そんな私の不安をよそに、さっさと食い付いて当たり前のようにおっぱいを飲んでくれるウイル。

よかった、これでしばらく食の心配はいらないわね。って、それはちょっと違うかしら……。

黙々と飲んでたウイルだったけど、しばらくすると満腹まんぷくになったみたいで口を離れた。私の方を見つめて、もうよいぞ、とばかりに笑っているのは気のせいだと思っの。

……まさかね。

だって、さっき生まれたばかりの赤ん坊よ？ 自分の意思を表現できるはずないわよね。

まあ……でも、本当にそうだったら、うちの子は天才ね！

人生と子育ての先輩であるマリー（口が裂けても本人には言えないわね）に教えてもらった通り、私は恐る恐るウイルを左肩に抱きかかえた。

えーと、背中を優しく叩くんだったわよね。

数回叩いたところで、ウイルはきちんとゲップしてくれました。

「……ゲブッ」

地味……？

確か、はじめの子は吐いちゃったりするとか聞いたのだけど。

うちの子は優秀ね！

「お腹いっぱいになった？」

まだ話を理解できなくても、たくさん話しかけるのは大切なんだそうなの。

だから、たわいもないことをできるだけたくさん語りかけて。

愛情も込めて、ね。

抱っこして揺らしていたら、眠り出しちゃったわ。

あらあら、マイペースな子なのかしら？

まったく、なんでこんなに可愛いの？

## 6

まだ首が据わらない。

生まれてから何ヶ月経ったんだらうか？

とりあえず毎日の練習で手足と指はそれなりに動くようになってきた。

しかし……。

「あーうーいーうええーおうー」

発音ができん……。

だから毎朝、母親が何かしら身支度みじたくをしている間にこうして練習をしている。ちなみに今のは「あいいうえお」のつもりである。

つーか、動けんのがつらい。手足をジタバタしてみるが、いまだ寝返りには成功していない。

「あら、ウイル。もう起きてたの?」

扉が開くと、母が驚いた顔で見下ろしてきた。

あ、そうそう。ここ最近の収穫と言えば、赤ん坊だからなのか、驚異きょうい的な記憶力を発揮し、周りの人がしゃべっていることが分かるようになってきたことである。

「んー!」

一応、返事しておく。

まあ、普通の赤ん坊でも何かしら反応はするだろうから、多分不自然ではないはずだ……うん多分。

「ウイルは一人で泣かないでいい子ねー! ミルクにしましょうか」

そう言って母は俺を抱き上げた。

母の名前はリリイと言うらしい。

はい、とうかね。

もう慣れたもので、何の抵抗もなく朝食を取っている俺ですが、最近、視界がはつきり

してきたおかげで分かった事実があるのです。

……母、美人すぎる……!

十代のような白いもち肌もち肌に、綺麗なぶくぶくのピンク色の唇。シュツとしすぎない形のいい輪郭りんかくに、クリクリのおめめと綺麗な鼻がバランスよく配置されているのです。

これを絶世ぜっせいの美女と言わずして何と言う! って感じです。

これは、俺も将来有望ゆうぼうかなーと少し嬉しくなったが、もしかすると父親かもしれない。まだ父親に会っていないので何とも言えないというのが現状だ。

あ、ちなみに父親なんだが、何日経っても現れないから、これは複雑な家庭なのか……と不安になってたんだが。

三日前くらいに、メイドさんほい人が母に言っていた。

『よかったですね、奥様。旦那さまは領地を回り終わったみたいで、今ものすごい勢いでこちらに向かっていますしやるようです』

俺は安心した、そして嬉しかったよ。今世こんせでは、両親がいるって分かって。

ついでに言うと、この家は貴族らしい。そして更に言えば、父親は騎士のようだ。

貴族で騎士……響きこきがイケメンだから、少し期待している。

国の制度とか世界については、母親やメイドさん達の世間話からは分からないが、家の内装は中世ヨーロッパ風だから、そんな感じなのだろう。



「……んむ」

母親の……から口を離し、食事終了を主張する。

「あらウイル、もうお腹いっぱい？」

「ん」

そんなやり取りをしていると……。

「おおお！ ウイル！ 生まれたか、コイツめー！」

扉がすごい勢いで開いて、大声が聞こえてきた。

「あら、キアン帰ってきたの？ ——ウイル、あなたのお父さんよー、ほらキアン」

嬉しそうな母の声とともに俺は、父親のキアンに渡された。

危なっかしく俺を抱きかかえたその人は、嬉しそうな顔で俺を覗き込んだ。

「父さんだぞー、ウイル」

いい笑顔です。こっちもつられて笑っちゃうよ。

サラサラの銀髪に青い目。外国人風の顔立ち。

でもね。

なんで平凡顔なんだよー！！

よく見れば、前世の俺に似てるし……。

ここに來てから初めての絶望でしたよ、ええ、神様。

## 7

父さんの平凡顔が判明して計り知れないショックを受けた俺。

『すごくアナタに似てるわ』との母の言葉で俺は撃沈した。

こんなことなら、神様にイケメンにしてくれっってお願ひすればよかった！ と今更な後

悔を一瞬だけする。

でも、あんな平凡顔の父さんが母さんをひっかけられたんだ。よくよく考えてみれば、

顔が全てじゃないのかもしれない。

それを父さんが身をもって教えてくれたぜ！

思い出してみれば、前世でも、クラスメイトには言っちゃ悪いが、顔はよくなくてもモ

テていた奴はいた。

顔が、とかそれらしい理由をつけて簡単に諦めていたけど、もうちょっと積極的に行動

していたら違ったのかもしれない。

うん。今世では、おれがんばる！

……と、無理やり前向きに考えて自分を奮い立たせてみる。

て言うか、母と父。

久々の再会で嬉しいのは分かるが、そこでイチヤイチヤしないでくれっ！  
俺の傷心のハートが更に碎けるから……。

あ、「傷心のハート」って「外国人の人」みたいだわ。

前世では友人と色々言葉遊びしたなー……「外国人の人」にはじまり、「頭痛が痛い」「一番最初」「豚足の足」とか。あとは、「カモシカの足のよな足」……これはちょっと他のと遊びの種類が違うけどな。

「カモシカのよな足」では、足そのものが一頭のカモシカの形をした、グロテスク極まらない状態を表してしまう、というのが友人の持論だった。

だから、「カモシカの足のよな足」という言い回しをしたのだが……今考えてみると、なんであんなに馬鹿笑っていたのか分からない下らなさである。

ちなみに俺が今こんなことを考えているのは、全力で気を紛らわせるためだ。

お隣に寝ている両親から、変な雰囲気なんて漂って来てない。決して来てないぞー。

嘘言うな？ ふざけんな殴るぞ。

よし、こういうときは睡眠だ、睡眠……。



必死に自分で暗示をかけているうちに寝てしまったらしい。

気がつくと、窓から白い光がぼんやりと差し込んでいて、ああ朝か、と分かる。

隣は……と、よかった。もうすでに二人は起きたあとのようだ。

最近だいたい身体が言うことをきくようになって、自制というものができるようになってきた。

空腹を訴える腹をよそにボーっとしてみる。

ここまでするのに長かった。頑張ったよ、俺。

まだそんなに経ってないって？ あのね、泣いて呼び立てるのは元日本人の俺としては  
忍びないやら恥ずかしいやらで、何の苦行かって感じなわけ。

長かったよー。

というわけで、この空腹を前に平然とする自分にちょっと悦に入る。

まだこの部屋だけが生活圏の「ぎ☆ひきこもり」な俺だが、まあ赤ん坊だから仕方ない。

ここは寝室らしいんだが、廊下に続く扉の他に、隣の部屋に通じる扉がもう一つある。

隣の部屋は着替えたりくつろいだりする部屋のようだ。

無駄にデカイ部屋の真ん中に、やはり無駄にデカイ両親のベッドが陣取り、その横――

隣の部屋側にちょこんとあるのが今俺が寝ているベビーベッドだ。

まだ首が据わっていないくて、動こうにも動けないから仕方ないけど、首が据わったらまずはこの部屋から出たい。

この世界の、そしてこの家の情報が欲しいのですよ、奥さん。

しかし、第一の難関はこの柵だな……。

赤ん坊が落ちないように、ベッドの四方に柵が取り付けられている安心設計！

俺にはとつてもありがた迷惑である。

でもさ、こんな中世ヨーロッパ風の部屋に、貴族や騎士とかいうワードですよ？ ワク

ワクしちゃうわない？

ワクワクするよな！ いかにも異世界ファンタジーって感じだよな！

だから、今俺は必死で首が据わった後のために、腕と足の筋トレきんを行っている。

それに、発音練習も続けている。

「かーくいーくーえーこおー」

端から見れば、手足をジタバタしてるだけなんてことはないぞ。

「ひゃあ%イうーへえ△よー」

サ行は苦手だ……。

「お、ジタバタしてるー！ もう起きてたのか？ 泣かないのか？」

扉が開いて父さんが入ってきた。

ポスポスポスと絨毯じゅうたんを踏みつける音が三回聞こえて、俺は持ち上げられる。

今の俺が小さいせいとか、体感では父さんは無駄むだにデカい気がする。

実際、一八〇センチは超えているだろう。

「母さんはまだ着替えてるから、父さんと遊んで待つとけよー」

嬉しそうな顔ほおずして頬擦りしてくる。

いや、嬉しそうなのは良いんだけどさ、痛い！

微妙びひょうに伸びた髪ひげが痛いです、父！

「わんおいえいひよっでおうおー！（ちゃんと髭ひげそつてこいよー！）」

抵抗するべく全力で手足をジタバタして叫ぶが、短い手足は父に届かず、顔にクリティ

カルヒットは与えられない……。

「おおー、父さんに会えて嬉しいか、ウィルー！」

しかも上手くしゃべれないせいで勘違いかたがひしてるー！

くそっ……これからもっと発音練習しなきゃな！

おれががんばる！

その後、疲れてぐったりした俺は父さんになすがまにされ、母が来るまで大人しく遊ばれていました。

おれ……がんばる！

## 9

生まれてから、五ヶ月くらいは経っただろうか。  
退屈な日々は終わった。

そう——首が据わったのだ！ わー！

そして、必死で毎日筋トレしてた甲斐あって、すぐにホフクゼンシンを習得。今ではなんとかハイハイつばいのできるようになった。

うん、初寝返りが打てたときは本当に感動した。転生してからの一番の感動だった。思わず泣きそうになったぜ……。

しかし、そこからが大変だった。だって、ほぼ四六時中監視の目がある。

母さんとかマリーさんとか。後は、その他メイドさん達。

メイドさん達、だらしのない顔で『かわいいかわいい、食べちゃいたい』とか言ってほつぺたつついてくるから、正直怖いんだけどな。

まあ、平凡顔の俺がこんなにして嘸されるのも、子供のうちの特権だと思ふことにしよう。

そして監視をかくぐり部屋を抜け出……そうにも、まずベッドから下りられない。

このっ、忌々しい柵め！

最初は柵をよじ登ろうとするも、足の筋力が足りなくて、あえなく諦めた。これは、掴まり立ち会得までは無理なのかな、と打ち拉がれた俺だった。

柵を睨みつけ何分か。

そして、俺は気づいた。

柵に、扉がある！

木がパズルのよう加工されていて、赤ん坊には開けられないようになっている。

しかし俺には頭があるぜ！

人差し指で頭を指してボーリングを決め、ニヤリと笑う赤ん坊。

結果。

簡単でした。

下りるのは少し怖かったが、握力と腕力を駆使して柵の下にぶら下がったら、何とか足がついた。

「ふっ」

ハイハイをしながら、ベビーベッドを見上げて少し笑う。

うむ。達成感。

ベビーベッドからの脱出に成功したあの日から、俺は母やメイドさん達を目を盗んでは脱出し、屋敷内を動き回った。

そして繰り返し返しの涙ぐましい努力の結果、俺はこの広い家を制覇した！  
よくここまで見つからずにやれたもんだ。自分を褒めてやりたい。

もしかしたら、俺はスパイとか向いているのかもしれない。

そして、大きな収穫。

この家には、小規模な図書館くらいの広さの書庫があった！

情報を求めている俺のテンションは一気に跳ね上がる。

でも、しかーし！

そこで大きな壁にぶち当たった。

……文字が……読めん！

と、いうことで俺は転生モノでお馴染みのアレを実行しようと思い、今日も書庫に来ていた。

書庫の入り口付近の棚にある物を口に咥えて進み出す。

犬みたいだが仕方がない。

これが一番効率がいいのだ。……ハイハイな俺には。

「あら、起きていたのウイル」

部屋に戻ると、今日も美人な母さんが、隣の部屋から絶妙なタイミングで寝室に入ってきた。

……ふうー、アブね……。

「ん」

そして、持ってきた例のブツを差し出す。そう、定番の。

「絵本ね、どうしたのかしら……マリーが持ってきたのかしらね……ウイル、読んでほしいの？」

絵本を手に取り、一人で勝手に理由をつけて納得してくれた母に内心ガッツポーズ。

いよっ!! 待ってました!

と言わんばかりのテンションで、俺は返事をする。

「ん！」

「……めでたし、めでたし」

絵本の内容は正直ひどかった。

昔むかしから始まり、貧困生活を送るおじいさんとおばあさんが、ある日捨て子を見つけ、拾って育てたら、その子が魔力チートで世界を救って一家が金持ちになる、という話わけわからん。途中からいきなり魔法とか出てきたよ。日本昔話みたいな教育的な話かと思つてたら、いきなりファンタジー入るのかよ！

まさかの展開に思わずツツコミそうになった。

まあそれはそうと文字は覚えられた。つか本当赤ん坊の脳味噌すげえな。

日本語のように平仮名とか漢字とか、いくつも表記があるんだつたら大変だな、と思つていたら、アルファベットみたいな形式らしく簡単に覚えられた。

「あーう」

ありがたいのつもりで、一応母に話しかける。

「どういたしまして」

笑顔の母。……通じたよ……。

これぞ、噂に聞く母の特殊能力という奴か。

そして、それからの俺の日々は、筋トレと発音練習と極秘捜査（読書）の繰り返しになるのだった。

## 10

首が据わって早数ヶ月。あと少しで一歳になるそう。

発音練習の成果もあり、何とか話せるようになった！

それに、無事掴まり立ちを覚え、俺は結構この世界のが分かってきた。

まあ、分かったといつても、あくまで文字を通してだけだ。

この世界自体には名前はないらしい。考えてみれば、前世だって地球にいたって認識はあるが、あくまでそれは星の名前なのであって世界の名前ではない。

とすると、この世界に名前がなくてもおかしくはないだろう。

それともう一つ、この世界には魔法がある！

母さんに最初に読んでもらった絵本、支離滅裂な話だと思つていたが違った。実はあれは結構有名な童話らしい。

つまり、この世界では魔法が存在していて、誰でも使える！ 魔法量に個人差はあるみ

たいだろ。

これを知ったとき俺のテンションは鱈登りに上がった！

キター！！と叫びそうになった俺に、地球にいる誰もが賛同してくれるに違いない。

こうなったら、使ってみるっさやないよな！

だって魔法だぜ！魔法！

子供のころ誰でも一度は憧れただろ！

と、いうわけで今日はこれから実験です。

いつもの通り、ベッドから抜け出した俺は書庫に来ていた。

たぶんメイドさんたちが駆けずり回って俺を探しているけど、そんなの知らないもん！俺には今、大きな使命があるのだ。

「よっしゃ」

床にべたんと座ったまま一人で気合いを入れて、本を手にとった。

『魔法 サルでもわかる基本編』

捻っているんだかいらないんだか、よく分からないタイトルだが、人を馬鹿にしたような

この名前の本に魔法という夢がまつてるってのは、すごいもんだ。

興奮しながらも、じっくり読んでいく。

「ふむふみゅ」

囁んでなんかいないぞー。

『魔法の基本』

一、魔力を感じましょう…魔力は常にあなたの体内および周囲に存在しています。

二、魔力を操ってみましょう…魔力を感じられたら、流れを作ってください。慣れてきたら、手の上などに集めてみましょう。

三、魔法を使ってみましょう…魔法には詠唱と魔力が必要です。詠唱に関しては、次ページからの「詠唱編」で！

ふむふむ……オーソドックスだな！

ファンタジーだ！

というか、俺が読んでたネット小説とかのまんまだわ。

……地球人の想像力……恐るべし。

早速、本の通りに練習してみることにした。

前世の記憶があるからか、一に関してはずぐに分かった。

身体の内側と外側から感じる温かい何か。前世では感じることもなかったもの、これが魔力という奴なのだろう。

まるで器官が増えたみたいだ。腕がもう一本生えてきた！　みたいな。  
えーと……次は、流れを作る、か……。

魔力は身体の内外を漂っているのだが、不思議なことに俺の一部という感覚がある。  
う……う……うごけえ……。

四苦八苦しくはくしていると、不意に脈を打つような感覚で魔力が動いた。

よしキター！

動かす感覚が掴めればこっちのものである。

「ぬぬぬ……」

初めての、くすぐったいような柔らかいような不思議な感覚に唸りながら、魔力を手に集めた。

ほのかに温かい気がする。魔力って生命力のようなものだろうか？　生命力って温もりっぽいもんがありそうな気がするし。

いったん溜たまった魔力を散らしてから、ページをめくる。

『詠唱編』

魔法を発動させるには、詠唱か魔法陣が必要です。無詠唱でもできますが、消費魔力が馬鹿高い！

<sup>ひ</sup>干からびたくなかったら、真面目に詠唱を覚えましょう。ただし詠唱をする際にはイメー  
ジが大事！　ここ、試験に出ますよ！（笑）

魔法陣も対応させて書いておきました。暇ならやってみたらいいと思う。

でも書き順むずいし、書く暇あったら口で言った方が早いから、やっぱ詠唱がオヌヌメ  
かな☆

実際に詠唱してみると自分の属性適性もわかるから、試してみるのが重要よ！』

なんだこの導入。ノリ軽いな、つーかオヌヌメって……と視線を隣のページに向けたと  
きだった。

……え？

《火》……？

俺は目を疑った。<sup>よみ</sup>詠唱と対応して書かれた魔法陣は、どう見ても漢字の「火」だったのだ。  
いや、まさか、と思い、次に書かれている詳しい説明を読み進める。

『《火》…読み方　ヒ

火が発生します。使う魔力で大きさが変わる。初心者ならまずはコレ！　ちよつとだけ  
魔力を使って早速やってみよう』



うん、マジだった。日本語わらわらわら。漢字わらわらわら。  
 なんだ、このご都合主義な展開。

しばらく固まっていた俺だったが、まあ立ち直りが早いのは数少ない俺のいいところだ。  
 気を取り直して、先を読んでいく。

『あ、詠唱する前に注意！ 個人にはそれぞれ適性属性があります。属性は基本ひとり一個だけ。もし二個以上の属性の魔法を使えたら、王宮へレッツゴー！ 魔法の天才として大物になれるわよ！

もし詠唱しても発動しない、とかでも落ち込まないで！ 他の属性がある！ この本の詠唱間違つてるとかケチはつけてくんよ』

だから、このテンションは何なんだろう。激しくうざい。

おお、火、水、土、風の属性魔法が多くて……その他に光、闇、空などもある、と。未確認のものもあるらしいが、研究所とかでやってるクソむずいことだからサルには関係ないと。

……おい、作者。何やってんだ、読者にサルとかひどいだろ。確かにタイトルに『サル

でもわかる』とか書いてあるけどさ！ ねえ！

まあいいや……。とりあえずやってみよう！

本のテンションに振り回されてちよつと疲れてしまったが、何だかんだ言つて俺はわくわくしているのだ！

無駄に咳払いとかして、かっこつけてみる。

手を前に差し出し、ピンポン球大の魔力を集めた。

魔力の塊を見ながら、ぼんやりと魔法を使う俺を夢想する。

オラ、わくわくすつぜ。

そして、詠唱。

『《火》』

ポツと音を立てて、空中にピンポン球大の火の玉が現れた。

キターーーーーー！！

おめでどう俺！ ありがとう俺！

魔法使っちゃったよ！

上がりまくるテンションのおかげで、思わず火の玉を落としそうになった。

……あつぶね……。

冷静になって、分析してみることにした。

## 立ち読みサンプル はここまで

とりあえず、俺には火の属性があるみたいだ。

安心。魔法が全然使えなかったらどうしようとか、ちよつと思つてたし。

そういえば、イメージが大事だと書いてあったな。

もう一度ピンポン球大の魔力を手の上に集め、今度は詳細にイメージする。

想像するのは、燃え盛るキャンプファイヤー。

……前世の俺は、同年年の全員でキャンプファイヤーを取り囲んでいるのにもかかわらず、ぼっちというむしろすごい奴だったけど。

当日はミニゲームをするから、と先生に練習させられて、本番で隣の女の子と手を繋いだときに、周りからすごい視線を向けられてさ。

炎に照らされてじゃなくて、ガチで顔が真っ赤になってる女の子と手を繋ぐがなきゃいけないとか……もう泣きたかったよね。あれ、絶対怒ってたか羞恥心に耐えてたかだって。

だってミニゲームの相手決めるとき、クラスの女の子たち必死な顔でじゃんけんしてたしね。

教室でこそそやってたけど、そのとき俺の名前も時々漏れ聞こえてたからさ。

きつと罰ゲームだったんだ……。

……と、今はそんなことどうでもいい！ 何考えているんだ俺！

今は、過去・現在・未来の全部の俺が憧れに憧れていた、あの！ 夢の！ 魔法に対面

